

---

# けいおん～一生で一度の～

オウムの法則

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん〜一生で一度の〜

### 【Nコード】

N74010

### 【作者名】

オウムの法則

### 【あらすじ】

生まれ育った町を離れた蓮見悠一 引っ越し先のお隣りの家に挨拶に行くとき…

これは一人の少年と少女の恋のお話

初投稿です 文才ないので理解しにくいかもしれませんが楽しんで

いただけたら幸いです。ご指摘などして下さったら嬉しいです  
もしよかったですら感想下さい

新たな出会い（前書き）

初投稿です

多分グダグダですw

まあとりあえずどうぞ

## 新たな出会い

「じゃあなー！悠一」

「引っ越しても忘れんなよ！」

「おうよ！忘れるわけねーだろー！！」

「また遊びに来るからな！」

つい三時間程前のやりとりを思い出してしまう

俺 蓮見悠一は

今日住み慣れた街を離れる

理由は親の転勤という

子供からしたらなんと

理不尽極まりない理由だが

ついて行かないわけにはいかない

すでに引越し先の町の高校への  
進学が決まっている

まったく今でも納得いかないぜ

ちなみにいまは  
引越し先の町へ向かう  
車の中である

助手席では妹の眞裕まひろが大きないびきをかきながら寝ている

その規則正しいいびきを聞いている内に眠くなってしまいそうだ

「親父ー あとどんぐらいで着くんだよ?」

「んまあ だいたい五時間ぐらいだな」

マジかよ…

「寝てていいぞー  
ハッハッハ」

何がおかしいんだよ  
言われなくてもそうするわ  
心の中で毒づきながら

「んじゃあ着いたら起こしてくれ」

親父にそう言つと俺は目を閉じた

おい

おい起きろ

起きろよバカ!

「っ!!」

突然頭をはたかれ悠一は目が覚めた

「いきなりなにすんだよ!」

「あんたが起きないのがいけないでしょ」

悠一の頭をはたいた本人

眞裕はまったく悪びれる様子もなく言った

「起こし方つてもんがあるだろ!」

「あたしは優しく起こそうとしたけど

あんたが起きないんだもの」

「仕方ないでしょ?」

はあ………何を言っても無駄な

気がしてきたので

悠一は文句を言うのをやめた

起こされたってことは

着いたってことが

頭をボリボリかきながら

車を降りると割と

真新しい家が目の前にあつた

親父は車に積んであつた荷物を下ろし

それをチャカチャカ家の中に運んでいた

運んでいる内に悠一に

気がつくと作業を中断して声をかけてきた

「おー起きたか

よく寝れたか？ハツハツハ」

「まあまあ寝れたよ」

「起こされ方が気に入らないけどな」

と小さく言うと親父は首をかしげ、眞裕が一瞬こちらを睨んできた

「？ まあ寝れたならよかったな」

「で どうだ悠一

この家は？なかなかだろ？」

「結構でかいな」

「だろー 家賃もそれなりにするがな  
ハッハッハ」

能天気な野郎め  
払えるんだろーうな

「眞裕も俺の手伝いをしてきているから  
お前はお隣りの家にこれ持って挨拶でもしてこい」  
「愛想よくな ハッハッハ」

と 羊羹の詰め合わせの箱を渡してきた  
親父の好物じゃねえか…

まあ他にすることもなし行って来るか

歩いて数十歩のお隣りのお宅は「平沢」さんだそうだ  
インターホンを押してしばらく  
家の中からドタドタと音がして  
すぐに勢いよくドアが開いた

と同時に悠一は額をドアにぶつけた

「いてっ！」

「あっ ゴメンゴメン！」

「大丈夫？」

悠一が思わずしゃがむと上から可愛いらしい声がした

「うん俺もドアの近くに立ってたから…」

立ち上がりそう言うと悠一は

目の前にいる女の子を見た

やや小顔で目が大きくて

焦げ茶色のショートカットで髪の毛の右側を黄色いピンで留めている

目線を下にやると彼女が着ているＴシャツが目に入った

「ふふっ」

思わず笑ってしまった

「えっ どうしたの？急に笑い出して」

「いやそのＴシャツがぞ…」

「へ？こね？」

そのＴシャツは黄緑の生地に

ハイテクとプリントされていた

「うん… なんで… ハイテクなの」

笑いながら問うと

彼女はTシャツを見下ろしながら

「えー知らないよー

でも 可愛いでしょ」

と なぜか得意げな顔を試みせた

あー うんと生返事をするに彼女が

「ところで何の用なの？」

と 聞いてきたところで

ようやく本題を思い出した

「え… っと 隣に引越してきた  
蓮見といます！」

「どうぞこれから

よろしくお願いします！」

決まり文句の挨拶をしながら

羊羹詰め合わせを差し出すと

彼女は目をキラキラさせて

詰め合わせ箱を見つめている

そのまま動かない

「あ あのー…」

声をかけると彼女は

「ハッ！」した顔になり

「平沢唯です！」

こちらこそよろしくお願いします！」

なぜかフルネームを言った

平沢唯さんは再び目をキラキラさせながら

「ねえ…今食べてもいい？」

と 聞いてきた

「え あ はい どうぞ」

「ん〜でもひとりで食べても  
つままないよー」

「あっ！下の名前はまだだったね！」

「えーと…」

「あ 蓮見悠一です」

「じゃあさ 悠くん  
いつしよに食べようよー！」

へ？悠くん？いつしよに？

「さあさ上がってー！」

そついうと平沢さんは俺を半ば無理矢理に家に連れこんだ

なんで今日初めて会った人と  
羊羹食わなきゃならねんだよ…

絶対気まずくなるだろ…

と思ったのだが  
そんなことは全然なかった

「へえーすごく遠くから  
引っ越して来たんだね！」

「うん もうクタクタだよ」

羊羹を食べながらの  
平沢唯さんのマシンガントークのおかげで  
初対面にも関わらず  
打ち解けていた

「ここで平沢さんに  
ふと思った疑問を投げかけてみる

「ねえねえ思ってたけど  
ご両親は家にいないの？」

春休み中とはいえもう午後7時すぎである  
純粹な疑問だった

「お父さんとお母さんは今ドイツだよ！」

「え？じゃあ今この家にひとりで住んでいるの？」

「ううん 妹といっしょだよ  
今は買い物行ってるけどね」

「そうなんだー」

と いう会話をしている内に平沢さんは羊羹を食べ切っていた

さっき平沢さんが出してくれたお茶を飲んで

「じゃあ俺そろそろ家に帰るよ」  
と 言い立ち上がると

「あつ 羊羹ありがとうね！おいしかったよ！」

「おう そりゃよかった」

「こんどは別のお菓子を食べようよ」  
「また家に来てね悠くん！」

「はは機会があればな」  
「じゃあな」

平沢家を出て家に戻ると  
車で寝たにも関わらず  
どつと疲れが出てきた

親父に聞くと部屋を決めたりするのは  
明日以降の話なので  
とりあえず今日は  
そこらへんに布団を  
敷いて寝るとのこと

座敷の部屋に布団を敷いて  
潜り込むとすぐに睡魔が来て  
悠一は眠りに落ちた

新たな出会い（後書き）

どうぞでしょうか？

これって書くのすごい疲れますねw

これからがんばります

俺は奴隷ではない。そしてまさかまさかの…（前書き）

更新遅くなりましたw

まあこれからもこんなペースなので気長に待っていただけたら幸いです

ではではごっごー

俺は奴隷ではない。そしてまさかまさかの…

「ん…ああ」

時計は10時を指している。

どうやら半日以上寝ていたようだ。  
まあかなり疲れてたし…

グウウウゝ

そっぴゃ昨日は  
平沢さん家から帰ってきて  
すぐ寝たんだった。  
なにも食べてないや。

悠一が上半身だけ起こすと、ぼーっとテレビを見ている眞裕が目に入った。

「おい親父は？」

「朝早くに会社に挨拶してくるって出てっちゃった」

「遅くなるから、ご飯は適当に食べるだって」

そっぴゃと眞裕は横のテーブルに

置かれた一万円と地図を指差した。

地図にはマク○ナルドや

吉○家など赤く示されている。

「どうやら、昼飯晩飯をこの一万円を使って食べとのことらしい。」

「はあ…仕方ないか。」

「なんか買ってくるけど何か食べたいものあるか？」

「えーとじゃあねー…」

「ん〜じゃあ牛丼の大盛り！」

牛丼って…

真裕のやつ体に似合わないのがつつり食べるな。

しかも昼から。

しかも大盛り。

「食べんのか？」

「食べれるに決まってんでしょ。」

「あたしを誰だと思ってるの？」

「てかそんなことより早く買いに行け。」

それが買って来てもらう奴のいうことかよ。

口には出さず悠一が毒づく。

こいつに何か言えば10倍返して帰ってくる。

そんな奴に喧嘩を売るようなことはしたくない。

口の悪さは折り紙つきだな。

黙ってりゃかわいいのに…

「早く行けつつってんだろ。」

まったく…俺は奴隷かよ。

「わかった じゃあ買ってくるよ。」

「よろしくねー」

違う店に行くのも面倒くさいので  
悠一も牛丼にした。

早くしないと眞裕にキレられる。

牛丼屋までなんとか

たどり着いてその帰り道。

遠くに見覚えのある姿が見えた。

しかし今日は一人ではなかった。

「お姉ちゃん 今日のお昼ご飯は何かいい？」

「んー憂が作る料理は、なんでもおいしいから迷っちゃおうよ」

「えへへ お姉ちゃんにそう言ってもらえると私もうれしいな。」

「じゃあ憂の作るハンバーグがいい！」

「わかった！じゃあお昼はハンバーグにしようね。」

間違いなく一人は平沢唯さんだ。

となると隣にいるのは…？

と ふいに平沢唯さんがこちらを向く。

あー悠くんだー！

笑顔でこちらを指差しながら近づいてきた。

「よう。」

なにしてるの？

「俺は昼飯を買いに行った帰りだよ。」

「平沢さんこそ何してんの？」

「唯でいいよ！私はねー妹と一緒に昼ご飯の買い物に行ってきたんだよ。」

そう言うと横の女の子が

「平沢憂です。」

「蓮見悠一さんですよね？」

お姉ちゃんから話は聞いてます。昨日はお世話になったようですね……」

「いやいや全然だよ。」

こっちは羊羹あげただけだし」

「おいしかったよ」

悠一は二人を見比べてみた。

顔つきはとてもよく似ている。

髪が違うけど…

ただ

中身が違う!!

礼儀正しくて、すごいしっかりしてるし…  
なんかどっちが姉でどっちが妹かわからないな。

「悠くんは何のご飯を買いに行ってたの？」

「え？ああ、妹に頼まれて牛丼をな」

いきなり話かけられたので焦りながら答える。

「悠くん妹いるんだ！全然知らなかったよ。年はいくつ？」

「年子だから俺のひとつ下かな。14才。」

「じゃあ憂といつしょだね！」

「うん！」

「じゃあ悠一さんはお姉ちゃんと一緒にですね」

「唯って今何才？」

「15才！今年から華の桜ヶ丘高生だよ！」

ん？

「悠くんはどこ的高校？」

「俺も………桜ヶ丘だ。」

「え！？そーなの！？悠くんも一緒なんてなんか嬉しいなあ。」

「うん。でもこっちに引越してきたばかりで結構不安で……」

「大丈夫！わからないことがあったらなんでも私に聞きなさい！」

唯が「任せなさい！」とばかりに胸を叩く。

頼りにしているのか……

どっちかと言えば妹さんのほうが…

「ところで悠くんのお家の晩ご飯は何？」

「え？」

いきなり話かけられたので焦ってしまっ

「えっと またなんか買いに行こうかなと…」

「それならうちで食べなよ！」

は?????

「うち普段は親いないから、憂がご飯作ってるんだ。」

「いいよね？憂。」

「うん！もちろんだよ」

「妹さんと一緒にぜひ食べに来て下さい！」

「じゃあ そうとなると晩飯の材料も買わなきゃね」

「っと 待て待て！

ほんとにいいのかよ

まだ会って日も浅いし迷惑かけるし…」

「全然いいですよ。大勢で食べる方がおいしいですじ。」

「ね？お姉ちゃん。」

「うん 私も悠くんと食べたい！」

「じゃあ決まりだね！」

そこまで言うなら…

正直 晩飯も買いに行くのは面倒くさかったのでもうこはちそうじになるう。

「じゃあこちそうじになるよ。」

「悠一さんなにが食べたいですか？」

「えっと…なんでもいいけど、みんなで食べるならやっぱり鍋とかがいいかなあ？」

「わかりました。じゃあ鍋の材料買ったときますね」

「お金の方は後で言ってくれたら…」

「あ！いいですよ。」

今日は二人の歓迎会みたいなものですから。」

「憂ふとつぱら〜」

「ほんとにいいのか？ありがとな」

「じゃあまた用意ができれば呼びに行きますね。」

「わかった 妹にも話しておくよ。」

とりあえずその場は別れた。

ふう…引っ越してきてから何かせわしないな。

つい昨日越して来たばかりなのに、もう一週間ぐらい住んでいる気がするよ。

まあ 楽しいからいいか。

というか二人とついつい話し過ぎてしまったようだ。

やべー マジで急がないと眞裕にキレられる。

眞裕に怒られたくないと思えば自然に歩みは速くなる。

本当に奴隷みたいだなと自分でも思ってしまった。

悠一は早足で眞裕の待つ家に帰った。

俺は奴隷ではない。そしてまさかまさかの…（後書き）

半分寝ながら書いたので誤字脱字あるかもw

次はできるだけ早くしたいです！  
自信ないけどw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7401o/>

---

けいおん～一生で一度の～

2010年11月22日20時03分発行